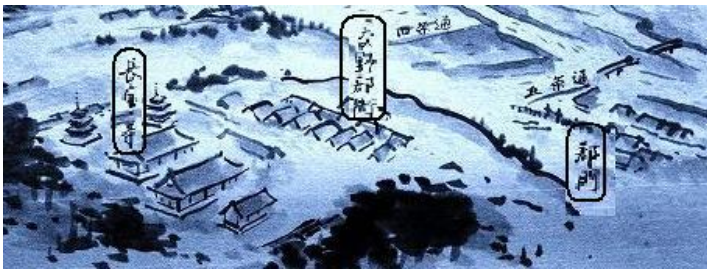
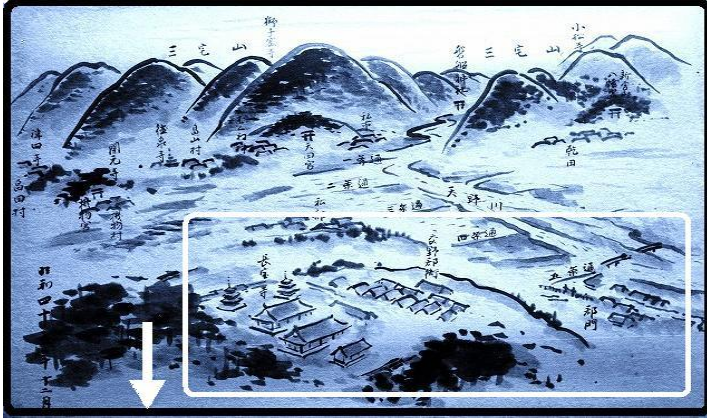


ふるさと交野を歩く

「郡津の東高野街道を歩く」：パート6

24, 11, 10

【行程】 京阪郡津駅→松塚→極楽寺→丸山古墳→藪の下農地→出鼻橋→<東高野街道・ものきき→茶屋の清水>→中小路集落→郡津神社→くら山→明遍寺→京阪郡津駅



●郡津とは・・・郡津と書いて「こうづ」と読む。おこりは郡衙（ぐんが・役所）の門の前からおこったので郡門村。最初は「こうど村」といった。いつのまにか「づ」と呼ばれ、大坂奉行所の命により「郡津」と改めた。（1804年）

●交野郡衙とは・・・

古代律令社会で地方の民を統率するのが郡司、年貢米を徴収する中心地が「郡衙」役所であって米倉が林立していた。
※高槻の「郡家」・茨木市の「郡山」、「郡家」・寝屋川の「茨田郡家」など同例



昭和39年郡津駅



長淵の農耕

●長淵とは・・・京阪電車郡津駅から村野駅の線路両側に広がる土地は天野川の川床と同じ高さで低い土地である。一雨降ると線路や畑は水浸し、いつまでも水がひかなかった。山崎橋手前の村の住宅の所に「長淵池」があった。線路脇の用水路は水はけ用として人工で掘られ北川から天の川に注ぐ。

●交野少将の話（交野少将とはだれなのか？）

「かきつゆるうき身の沫と成ぬとも

誰かとはん跡の白波」：風葉和歌集



松塚会館前の歌碑

郡津の郡司の娘が失恋し、「長淵池」へ身を投げた話が残る

●弘法大師の常夜灯

駅の北側の踏み切りを越え小川を渡り左折すると大きくて立派な常夜灯に出会う。
<大峰山講、文政10年、1827年の銘がある>



●極楽寺

融通念仏宗・本尊：阿弥陀如来立像 極楽寺は1345年頃に創建、大坂冬の陣（1614年）で全焼、1700年代に再建されたようだ。



●丸山古墳

郡津山崎に築かれ円墳の形から丸山古墳と呼ばれ実際は南北の前方後円墳ではと推測されている。墳丘の高さは31.3m、土師器が出土しているが、築造年代、墳形、埋蔵の内容は不明



《北川の堤・藪の下の農地をウォークしよう！》
交野三山と丸山古墳が一望できる、見晴らしが良い！

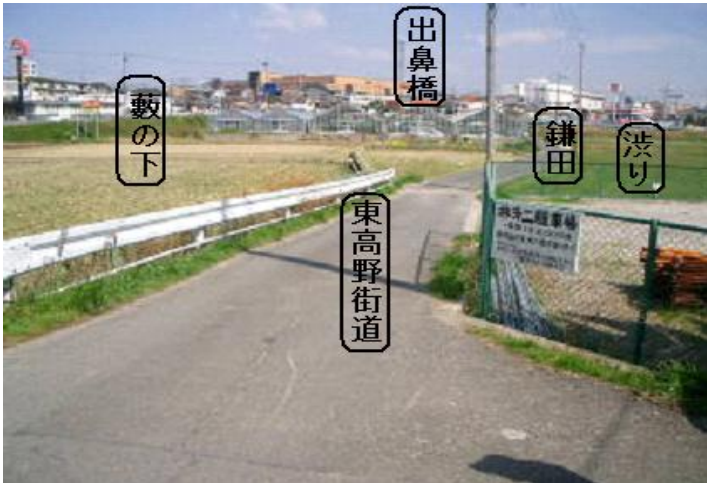


● 東高野街道

数ある高野街道のうち、いちばん東側に位置する道筋。八幡で京街道と別れ、河内の東部を通り、河内長野で西高野街道と合流し、以南は高野街道として紀見峠、橋本、高野山へ至る。仏教信仰の一般化に伴い、高野山参りが盛んになる参拝道

唯一、交野を出鼻橋→茶屋町→天野川へと東高野街道が通る

◆ 東高野街道筋の伝説といわれ



◆ 藪の下・ものきき



◆ 茶屋の清水



◆上茶屋： 街道を通る人のために休憩所があった。現在でも「茶屋町」と呼ばれている。

◆蚊封じの池： 明遍寺と郡津駅を通じる交差点附近が「蚊封じの池」だという。弘法大師が「蚊が地面から3尺のところまでくるな！」と祈られると蚊がこなくなった」といわれている。

◆瑞塔寺 日蓮宗のお寺があったが廃寺された。

◆うきんだ： 蚊封じの池の周辺は土地が低く排水が悪く僅かの雨でも田が水につかるので「うきんだ」といわれている。



郡津の村中<梅塚・水塔寺・東ノ口>昔の佇まいを歩いて郡津神社へ

● 郡津神社



郡津神社

単弁八葉蓮華文
(たんぺんはちよう
れんげもん)

忍冬唐草文(にんど
うからくさもん)

祭神は、本殿が素戔嗚命(すさのおのみこと)・住吉明神・天照大神、末社には金刀比羅大神・天神地祀・稻荷大神・貴船明神が祭られている。今の郡津神社は、郡津神社として現在の地に祭られているが、明治以前は、一ノ宮・二ノ宮・三ノ宮と、別々の土地に祭られていた。今の郡津神社が一ノ宮で、祭神は素戔嗚命(すさのおのみこと)、二ノ宮は住吉明神で東高野街道の上茶屋の西の台地にあった。

また、三ノ宮は天照大神で大塚の地に祭られていた。明治6年3月、神社の統合がなされ、二ノ宮・三ノ宮が一ノ宮に合祀されて名前も郡津神社となった。よく言う「牛頭(ごおず)天王」とは素戔嗚命のことであり、疫病除けの神であり、農業の神でもある。

神社の裏手には明治の初めまで官寺の長宝寺(奈良時代創建)があったと伝えられ、白鳳時代の瓦が出土している。

● 明遍寺



明遍寺正門

九重塔

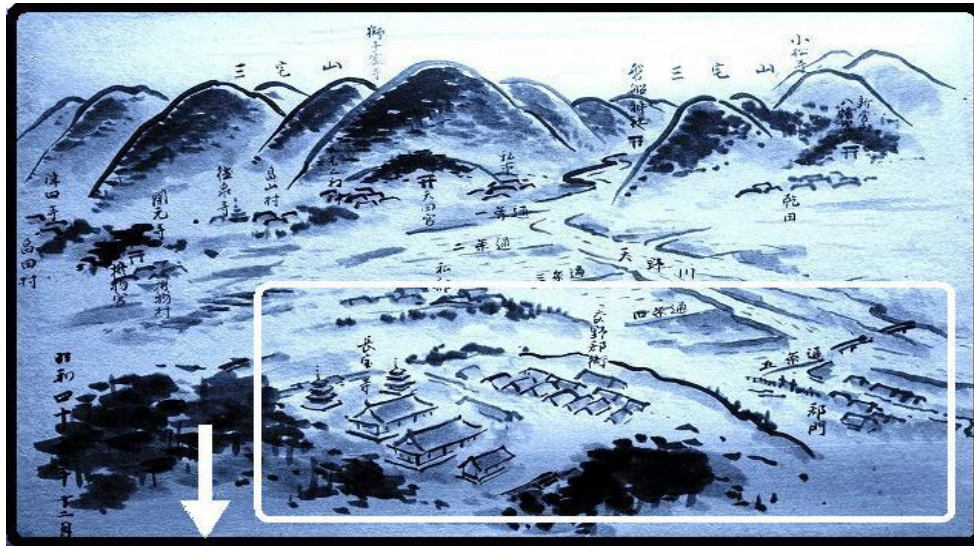
河内観音霊場

明遍寺は攝取山と号し、源平時代、白河上皇の側近で、学者であった藤原信西が平治の乱(1159年)で源義朝に殺されたが、このとき信西には26人の子があったが、内男子13人は出家して僧になったという。

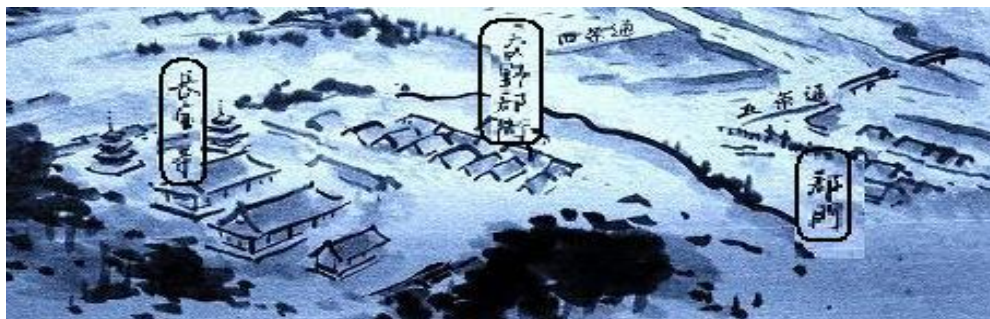
明遍はそのうちの1人で兄弟の中でも最も優れていたとこのことで、治承年間(1177~81年)高野山蓮華三昧院で修行したが、浄土宗の開祖法然に帰依し、京都と高野山を度々往復するうち当地(交野郡郡門村)に休息のため庵を作り、近在の百姓に念仏信仰を解いたのに始まるという。

寺号はこの明遍より起こるが、その年代は明らかでなく、当初は阿弥陀寺と号したとも伝わる。

資料 3



資料 4



資料 5 交野の少将（在原業平？）



※平安時代初期の貴族・歌人。平城天皇の孫、昔から美男の代名詞、『伊勢物語』は、在原業平の物語であると古くからみなされてきた

●『交野の少将』（かたののしょうしょう）は、平安時代に成立したと見られる日本の物語。『交野少将物語』とも呼ばれる。また、その主人公と目される架空の人物（モデルとなったと見られる実在の人物については後述）。作者は不詳。現存する写本は無く、逸書となっている。

●「交野」は河内国交野郡、現在の大阪府交野市のこと。「交野少将」は右近衛少将・藤原季縄の通称で、楠葉（現在の大阪府枚方市）に別荘を所有していた季縄自身ないし季縄と交友が在り、しばしば交野を訪れていた在原業平らの人物像を基にして、後世に創作された人物が「交野の少将」と見られる。

紫式部が『源氏物語』を執筆し、光源氏を登場させるまでは「交野の少将」が物語の美男子を意味する代名詞的な存在であったことが『落窪物語』や『枕草子』の記述より示唆される。また『風葉和歌集』に作中の和歌が採られており、その詞書から部分的に物語の筋書きを知ることが可能である。

●あらすじ

色好みで文才に長けた美男子として都で評判である交野の少将に郡司・宮道弥益（みやじえびき）の娘が一目惚れする。交野の少将が鷹狩をした折、郡司の館に泊まり娘と一夜を共にする。しかし、恋多き男である交野の少将は娘が待てど暮らせど郡司の館を訪れることは無く、ただ月日が過ぎて行くことに絶望した娘は長淵と呼ばれる淵への身投げを決意する。娘は淵のそばを通りかかった鵜飼いの男に自分の着物の端を引きちぎり、鵜飼いが灯していた篝火の炭で着物の端に辞世の歌を書きつけ、着物の端を交野の少将に渡すよう鵜飼いの男に言い残して長淵へ身を投げた。

資料 6 ● 極楽寺の石像



資料 7

●瑞塔寺

茶屋町の中 伝次郎さんのお宅の向い側にあった。(弘法の井戸が屋敷内に) 郡津共同墓地の一番奥には、「南無妙法蓮華経・瑞塔寺」と刻まれた大きな石柱があります。

この石柱にも右面に「河州交野郡郡門村」、左面に「享保八(1723)癸卯九月十八日」とあり、このころに「郡津」は「郡門」と書かれていたことを示しています。

●ものきき

北川の出鼻橋から南に高野道を進むと左に「しぶり山」(交野女子学院)があり、しばらく行くと右に「さきの山」左前に北尾の集落の建つ梅塚の台地に達する。

この梅塚の台地上がるために道は切り通し状になっていて、道の両側が崖になっている。

昔はこの崖や崖上に大きな松が茂っていて薄暗くなっていた。

郡津の人々が何か心配ごとや悩みごとが起こったら、朝早くこの松の木に潜み高野街道を、朝一番に通る旅人の会話の中から解決する言葉を聞き取ったという。そのようなことから、このがけ道を「ものきき」と呼んでいる。

●茶屋の清水

昔、ある日のこと、茶屋に見すぼらしい旅の僧が来て水を一杯ほしいと所望したが、誰も水をすすめる者がなかった。ところが上茶屋で水を汲んで差し出す人がいた。その僧は弘法大師で、そのお礼に清水の湧き出る場所を教えたという。茶屋町の瑞塔寺跡の向いに「中 伝次郎さん宅」がある。屋敷玄関の右側に「弘法の井戸」が現存。



資料 8 ●郡津神社

祭神は、本殿が素盞鳴命(すさのおのみこと)・住吉明神・天照大神、末社には金刀比羅大神・天神地祀・稻荷大神・貴船明神が祭られている。今の郡津神社は、郡津神社として現在の地に祭られているが、明治以前は、一ノ宮・二ノ宮・三ノ宮と、別々の土地に祭られていた。今の郡津神社が一ノ宮で、祭神は素盞鳴命(すさのおのみこと)、二ノ宮は住吉明神で東高野街道の上茶屋の西の台地にあった。

また、三ノ宮は天照大神で大塚の地に祭られていた。明治6年3月、神社の統合がなされ、二ノ宮・三ノ宮が一ノ宮に合祀されて名前も郡津神社となった。よく言う「牛頭(ごおず)天王」とは素盞鳴命のことであり、疫病除けの神であり、農業の神でもある。神社の裏手には明治の初めまで官寺の長宝寺(奈良時代創建)があったと伝えられ、白鳳時代の瓦が出土している。

明遍寺から郡津神社にかけて一段高くなった台地を形成しており、この台地に郡司(ぐんじ)が住み、蔵が建ち、郡司の一族の力で郡衙(ぐんが)の東隣の今の郡津神社の場所に長宝寺が建てられていたことが確認されている。長宝(ちょうほう)寺址(じあと)の遺跡(いせき)の中央には郡津神社の社殿が建てられているが、その周辺から、多くの白鳳(はくほう)時代(じだい)の瓦片が出土している。

	<p>忍冬唐草文(にんどうからくさもん) 外側にある鋸歯文(きょしもん)(のこぎりの歯状の文)が白鳳(はくほう)時代(じだい)(645~710年)の特色、昭和51年、郡津神社の発掘で神殿の東から出土した軒丸瓦(のきまるがわら)</p>
	<p>単弁八葉蓮華文(たんべんはちようれんげもん) 明遍寺の南へ二本目の道から西で見つかった。</p>

● 明遍寺

	<p>本寺 門前</p>	<p>明遍寺は摂取山と号し、源平時代、白河上皇の側近で、学者であった藤原信西が平治の乱（1159年）で源義朝に殺されたが、このとき信西には26人の子があったが、内男子13人は出家して僧になったという。</p> <p>明遍はそのうちの1人で兄弟の中でも最も優れていたとのことで、治承年間（1177～81年）高野山蓮華三昧院で修行したが、浄土宗の開祖法然に帰依し、京都と高野山を度々往復するうち当地（交野郡郡門村）に休息のため庵を作り、近在の百姓に念仏信仰を解いたのに始まるという。寺号はこの明遍より起こるが、その年代は明らかでなく、当初は阿弥陀寺と号したとも伝わる。</p>
	<p>本堂</p>	
	<p>辻のお地藏さんから東へ200メートルほど行くと明遍寺があります。門を入ると正面に地藏堂、その後ろに九重層塔が見えます。この塔は、上部と下部で石質・形態が違っており少なくとも3つの塔を寄せ集めたようす。また、頂部は五輪塔の水輪が乗せられていて、一番下の四角い石の四面にそれぞれ、弥勒菩薩・阿弥陀如来・釈迦如来・薬師如来が彫られています。どの像も30センチくらいの大きさで、風化が進み、顔の表情や手と組まれた足の様子がかろうじてわかる程度です。</p> <p>もともとこの塔は、長宝寺（現、郡津神社境内）にありましたが、廃寺となったため明遍寺に移されました。</p> <p>この塔は南北朝から室町前期に造られたもので、他にも二尊仏やお地藏さん・阿弥陀さんなど数多く並べられています。いずれも相当に古そうに見えます。中には唐臼の軸受けに利用されていたのか、頭部にへこみをもったお地藏さんもあります</p>	
	<p>明遍寺境内の墓地の中ほどに鎌倉地藏と呼ばれている石仏さんがいます。風化が激しく顔の表情や衣の状態は分かりませんが、組んだ足の上に両手を置き、両親指の先を接し、人差し指を立てる阿弥陀如来の印相を結んでおられる状態はわかります。</p> <p>このお地藏さんは、鎌倉時代のものとされていますが、腰部より下が省略されていることから、室町前期から中期に造られたと思われます。</p>	
	<p>この松は明遍が数珠を掛けたと伝わる「数珠掛け松」。</p> <p>松の根元にある石は明遍が腰を掛けたと伝わる「腰掛石」。</p>	